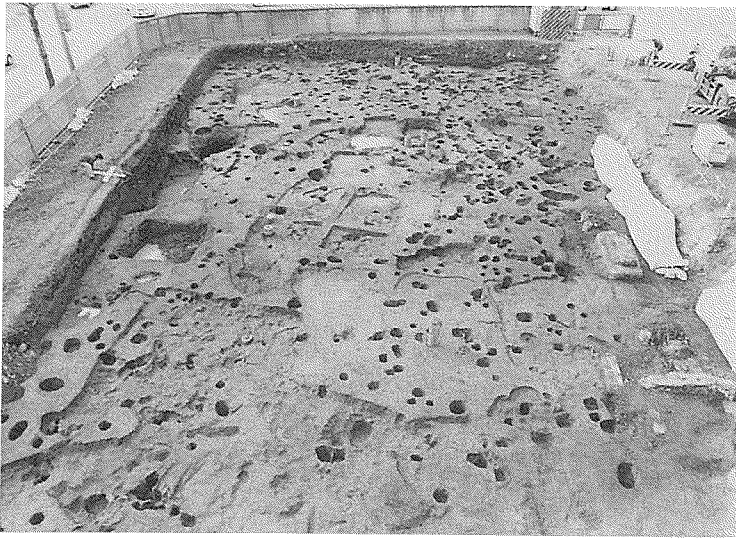


古 沢 町 遺 跡

第 3 次 発 掘 調 査 概 要 報 告 書



2 0 0 3

名古屋市教育委員会

例言

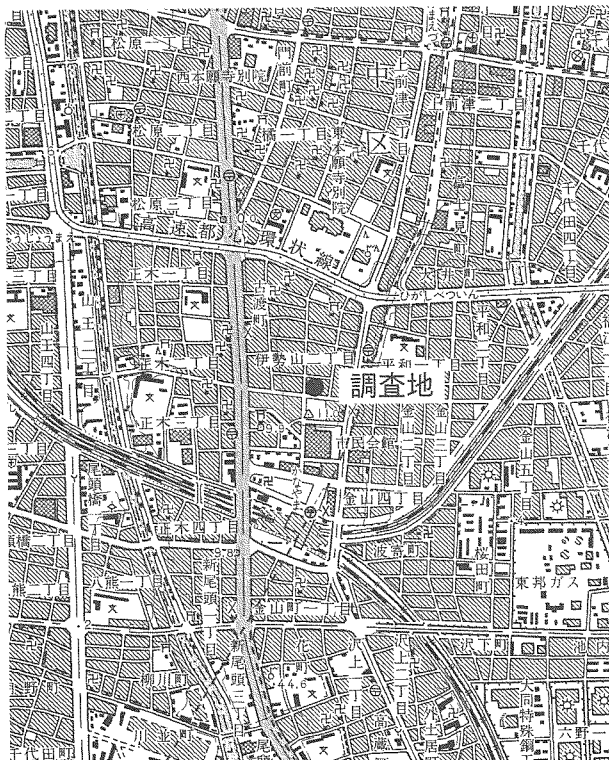
- 1 本書は名古屋市中区伊勢山二丁目12に所在する古沢町遺跡第3次発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、日本たばこ産業株式会社（JT）による（仮称）名古屋ビル新築工事に伴う事前調査である。
- 3 調査は、事業範囲約1,380m²を対象とした。
- 4 調査期間は、平成14（2002）年12月2日から平成15（2003）年3月20日までである。
- 5 発掘調査は、名古屋市教育局文化財保護室とジェイティ不動産との間で調整し、名古屋市見晴台考古資料館（学芸員 木村有作、伊藤厚史）が担当した。
- 6 発掘調査の記録、出土遺物は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 7 調査にあたり、野場喜子（名古屋市博物館）、佐野 元（瀬戸市埋蔵文化財センター）、仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）各氏のご教示を得た。
- 7 本書の編集、執筆は伊藤が行なった。掲載写真の一部は杉浦秀昭（名古屋市博物館）氏の撮影による。

目次

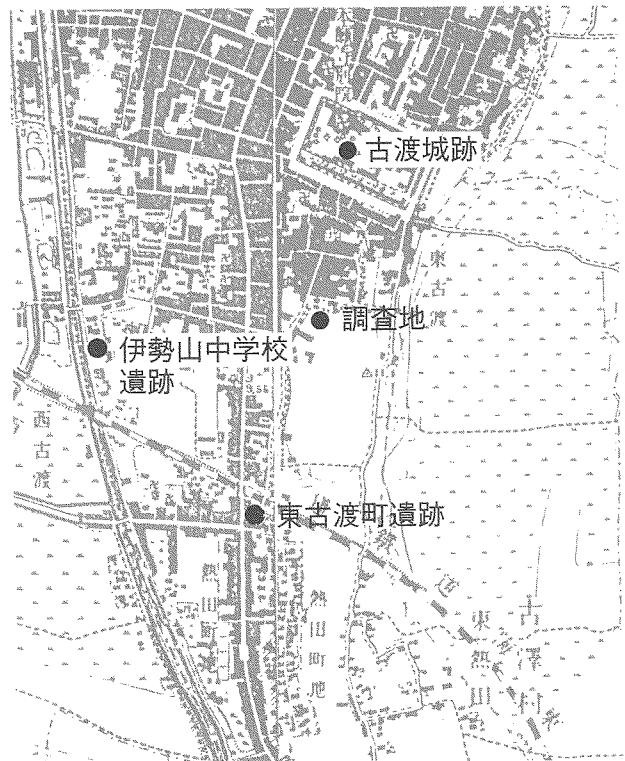
- I 遺跡の概要 1
- II 調査の概要
 - 1 調査の経過 1
 - 2 古墳時代の遺構と遺物 2
 - 3 中世の遺構と遺物 4
 - 4 近代の遺構と遺物 5

表紙写真 上 前半区完掘状況

表紙写真 下 南西より発掘調査地点を望む



第1図 調査の位置 (S=1/25,000)



第2図 明治時代の地形 (S=1/20,000)

正誤表

『古沢町遺跡第3次発掘調査概要報告書』に誤りがありました。下記のように訂正します。

裏表紙 9行 7-21 2938 ⇒ 23100, 7-21

I 遺跡の概要

古沢町遺跡は、名古屋台地の東縁部に立地している。付近の標高は、約10mである。遺跡付近はJR、名鉄、地下鉄の金山総合駅を中心にビルが林立する、交通の要衝である。1965（昭和40）年の地下鉄工事で主に弥生時代後期の遺物が発見されたことにより存在が明らかになった。また、1969（昭和44）年の市民会館の建設工事に際して行なわれた調査では、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺構、遺物が出土した。

その後、付近では金山総合駅南口の再開発に際して、東古渡町遺跡第1次～5次が実施され、古墳時代の方墳が多数検出された。また古沢町遺跡の西方300mに位置する伊勢山中学校遺跡や正木町遺跡でも近年には多くの調査が実施されている。

一方、古沢町遺跡では、その後調査をする機会がなかったが、1994（平成6）年に市民会館の北側で約1,400㎡を対象に第2次調査が行われた。調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓2基のほか竪穴住居2棟、大型土坑4基、中世の堀などが検出され、弥生土器、須恵器、古代の瓦、山茶碗などが出土した。縄文晩期土器は、破片がわずかに数点出土したに留まった。

II 調査の概要

1 調査の経過

今回の調査は、日本たばこ産業株式会社が（仮称）名古屋ビルの建設を計画したことにより、実施した。調査は、敷地の西半分にわたり、南側の事務所棟と北側の販促物品庫の位置が対象地である。排土の積み置きの関係から、2回に分けて調査することにし、まず、南側半分を、続いて北側半分を調査した。調査地には以前製品倉庫が建っていたが、表土掘削の結果、製品倉庫の基礎による遺構面の破壊は極めて少なかった。

前半区は、2002（平成14）年12月5日から表土

掘削を始めたが、東南隅に設けられた配電施設の撤去が済んでいなかったため、一部の掘削は後日になった。調査区は、任意に調査区の南西隅を原点とし、10m四方の方眼に区切り、南西隅から東へ1区、2区、東南が4区、その北側は、西端から5区～8区とした。

前半区では、西端から北東側にかけて柱穴状の小穴が極めて多く検出され、その掘削には多くの時間を割く事となった。小穴のうち確実に掘立柱建物跡を復元できた柱穴列は、1棟分にすぎないが、多くの建物が建てられていたと推定される。このほか、竪穴住居5棟、古墳の周溝と考えられる溝1条（SZ1）、古墳時代や中世の土坑、古代の小穴などが検出された。

後半区は、建設される建物2棟にまたがるため、2か所に調査区が分かれた。北側調査区（販促物品庫建設予定地）では、竪穴住居2棟、小穴、近代以前の規模の大きな溝（地下室か）、戦時中の防空壕、戦後の廃棄土坑などが検出された。南側調査区（事務所棟の残りの部分）では、古墳時代の竪穴住居5棟、土坑、中世の土坑、小穴、防空壕などが検出された。



写真1 調査風景

2 古墳時代の遺構と遺物

この時代の主な遺構は、堅穴住居跡（SB 1、SB 3、SB 4、SB 6、SB 7、SB 8、SB 9、SB10、SB11、SB12、SB13、SB14）、廃棄土坑（SK 9、SK31）、溝状遺構（SD 1）などがある。

SZ 1 前半区で検出した。北西隅部分のみであるが、幅1.2~1.8m、深さ約0.25mを測る。埋土中から土師器（甕、器台）が出土した。器台の年代観から、時期は4世紀後半と推定される。

SB 1 前半区で検出した。調査区西壁にかかるため全形は不明であるが、南北約4.7m、東西約3.6m以上、検出面からの深さ0.25~0.3mを測る。床面には幅約10cmの壁溝が巡る。埋土中より須恵器、土師器が出土した。須恵器は、坏蓋、坏身、無蓋高坏など、土師器は台付甕などがある。時期は、須恵器の年代観から5世紀後半と推定される。

SB 3 前半区で検出した。SD 1と重複し、先行して造られている。SB 3は、南北約3.2m、東西約3.4mを測る。検出面からの深さ約0.2mを測る。幅広の周溝が3辺を巡る。出土遺物は少なく時期が明確でない。SD 1は7世紀代と推定されることから、それ以前であろう。

SB 4 前半区で検出した。南北約4.7m、東西約4.15mを測る。熟田層上面の検出面がすでにほぼ床面にあたり、南辺寄り中央に直径0.3~0.4mの焼土面がある。床面は一部を除き貼床で、地山ブロック土と黒色土が混在しているところと、大部分が黒色土のところがある。

SB 6 前半区で検出した。東西約4.6m、南北約5.2mを測る。SB 4同様床面は貼床である。

SB 7 前半区で検出した。SB 6と重複していたが、先後関係は不明である。

SK 9 前半区で検出した。東西約2.6m、南北約3.3mを測る。埋土は黒褐色土である。埋土中から須恵器、土師器が出土した。須恵器には坏身、坏蓋などがある。須恵器の年代観から5世紀後半

と推定される。

SK31 後半区で検出した。4基の土坑が重複している可能性が高い。埋土上位層から須恵器、土師器、土錘が出土した。須恵器の年代観から5世紀後半~6世紀前半と推定される。

SK32 後半区で検出した。埋土中より須恵器高坏が出土した。



写真2 SZ 1



写真3 SZ 1 出土遺物



写真4 SB 1 遺物出土状況



写真5 SB1出土遺物

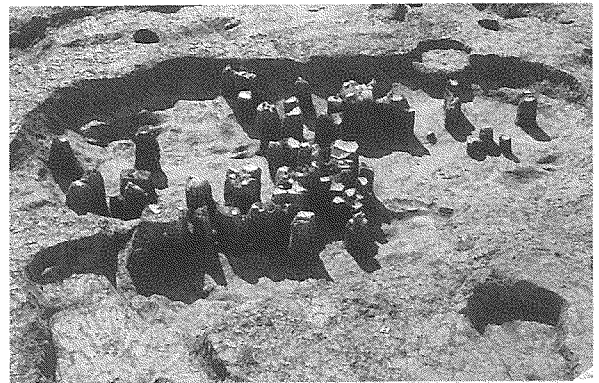


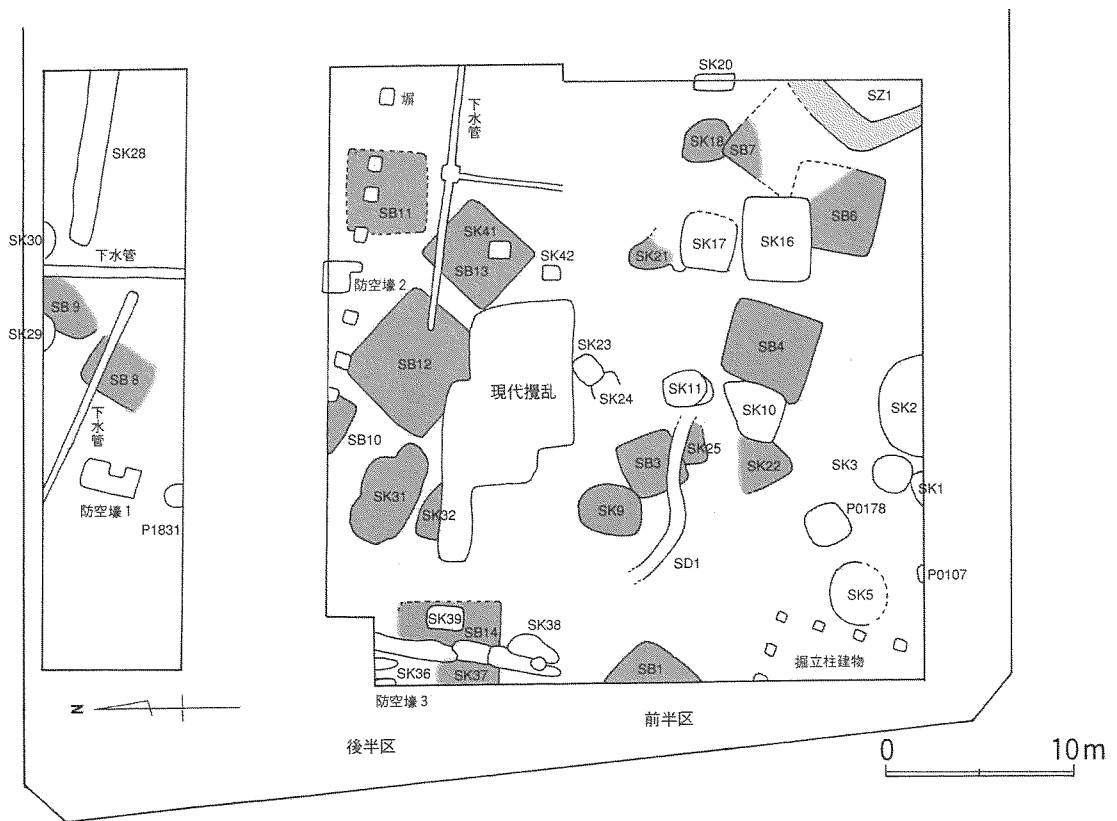
写真7 SK31遺物出土状況



写真6 SB3



写真8 SB6



第3図 調査区遺構平面図 (模式図) (S=1/400) 濃いアミ部は古墳時代(5世紀後半~6世紀前半)の遺構

3 中世の遺構と遺物

この時代の主な遺構は、SK 2、SK 3（井戸か？）、SK10、SK11、SK16、SK17、SK39、SK41、SK42、掘立柱建物跡などがある。

SK 3 前半区で検出した。直径1.8~2.2mの円形プランを有する。掘削深は、約1.2mまで。埋土中に貝殻が大量に投棄されていた。出土遺物は、中世陶器（山茶碗）碗、小皿、土師器伊勢型鍋、土師器皿などが出土した。

SK10 前半区で検出した。東西約2.4m、南北約2.3mを測る。埋土中から中世陶器が出土した。

SK11 前半区で検出した。3基の土坑が重複する。最も新しい土坑埋土中から中世陶器が出土したほか、貝殻が投棄されていた。

SK16 前半区で検出した。東西約4.0m、南北約2.2mを測る。四隅壁際に柱穴状のピットが掘られている。

SK17 前半区で検出した。東西約3.3m以上、南北約3.0mを測る。埋土中から中世陶器（山茶碗、常滑産甕）が出土した。

SK39 後半区で検出した。東西約1.0m、南北約1.1m、深さ約1.9mを測る。埋土中に貝殻が投棄されていた。また、底面近くで中世陶器（山茶碗）が出土した。

掘立柱建物 前半区で検出した。梁間2間以上（心々約2.0m）、桁行3間（心々約2.4m）以上を測る。柱穴掘方は、それぞれ約0.6m四方、深さ約0.5m前後を測る。出土遺物は中世陶器。



写真9 SK16



写真10 SK 3



写真11 SK 3 出土遺物

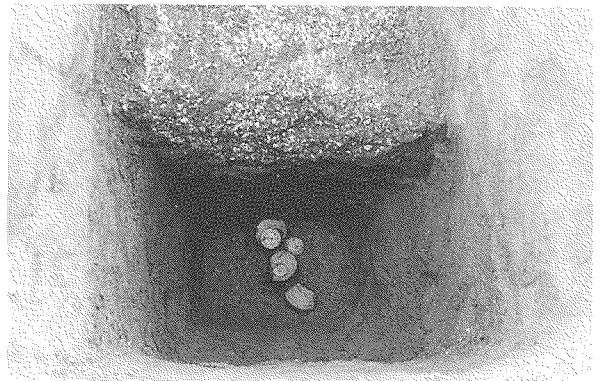


写真12 SK39



写真13 掘立柱建物

4 近代の遺構と遺物

この付近は、近世には城下町の外に位置することから、近世の遺構や遺物は出土していない。

調査開始後、窯道具が散見されたことから、何らかの窯元であることが伺われた。当地は、1893（明治26）年に旧藩士木全年輝が東雲焼を興した地とされる。東雲焼に関する情報は少なく、その詳細は明らかでないが、茶器や雑器などを焼成していたようである。東雲焼は、1924（大正13）年に廃業、これを惜しんだ横井米禽が買い取り作陶を始め、昭和戦前期まで続いていたようである（1941年没）。窯は、間口3尺に奥行き8尺の4房の登窯とされる。1929（昭和4）年、1933（昭和8）年の住宅地図には、当地付近に横井の名前がみられる。

前半区東壁面には、廃棄土坑2基の断面、南壁面には廃棄土坑1基、窯体1基の断面が検出された。特に東壁のSK20からは、窯道具がコンテナケース約20箱分出土した。製品は、碗などわずかに含まれるのみであった。

戦前期のものとしては、防空壕3基以上、塀の基礎（柱列）などがある。防空壕は、空襲で被災した家屋の瓦、土壁片、炭化材などが廃棄されていたうえ、防空壕も被災し、地壁は赤く焼け、床材の一部も炭化して残っていた。防空壕1は、L字形を呈し奥行き約2.45m、最大幅約1.3m、深さは地山面から約0.8mを測る。

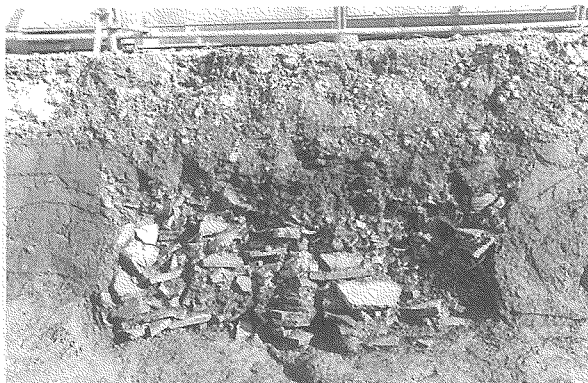


写真14 SK20



写真15 SK20出土遺物



写真16 防空壕1



写真17 後半区（北）完掘状況

参考文献

仲野泰裕「東雲焼」「米禽焼」『角川 日本陶磁大辞典』2002年

白崎秀雄「横井米禽」『室内』1974年

ふりがな	ふるさわちょういせきだいさんじはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	古沢町遺跡第3次発掘調査概要報告書							
編著者名	伊藤厚史							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 〃〃〃	東 経 〃〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふるさわちょういせき 古沢町遺跡	あいちけん なごやし 愛知県名古屋市 なかくいせやまにちようめ 中区伊勢山二丁目	7-21	2938	35°08'51"	136°54'05"	'02.12.02) '03.03.20	1380	ビル新築工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
古沢町遺跡	散布地 貝塚	古墳時代 中世	竪穴住居	須恵器 中世陶器 東雲焼窯道具				

古沢町遺跡第3次発掘調査概要報告書

2003年3月31日発行

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

印刷 株式会社アイコー社